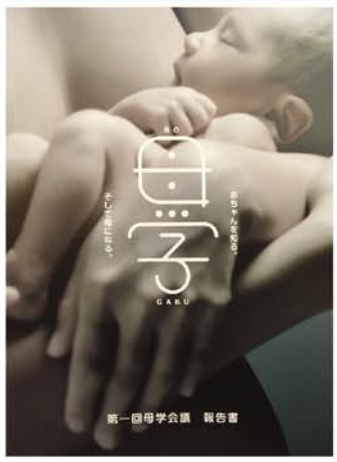


『母学』

「保育」の原点



昨年、小林登先生の『母学』という本をアップリカ育児研究所から出版させて頂きました。

国立小児病院名誉院長であられる小林先生は国際小児科学会の会長も務められた小児医学の分野で世界の第一人者として知られる方です。

『母学』のコンセプトは「赤ちゃんを知る。そして母になる」という副題がそれを表しています。小林先生は乳児期に五感(視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚)を介した母と子のコミュニケーション、母子相互作用の重要性を『母学』の中で説いておられます。

母子相互作用によってお母さんは赤ちゃんに愛情が湧き、やさしい母へとなっていくきます。赤ちゃんは心と身体に栄養が注がれ生きる喜び一杯になっていきます。このことが心と身体が「すくすく発達する」ということで、それこそが小林先生の『母学』における大切なメッセージなのです。

実は以前から私の父「葛西健蔵」が提唱していた「生命感動学」という理論があります。事ある毎に父が「生命感動学」

というものについていろいろな場所で語っていました。ある時、小林先生が「生命感動学」を体系的に纏め上げたいとお願いに來られました。「生命感動学」の理論理屈に感動されたという事だったので。日本小児医学界の頂点に立つ小林先生からの要望に父も大変喜んでお願いする事になりました。

小林先生は「生命感動学」の研究中であり、「生命感動学」というのは「生命は生まれながらに感動するという喜び、幸せを感動する心と能力を持っている…すなわち万人が生まれながらに生命に感動し幸せ感を持っている…生命の誕生そのものが幸せであり感動なのである…つまり、人間は生まれながらに平等に『あたたかい心』や『やさしさ』に感動し、幸せを感じる能力を持っているのだ」と私は理解しています。難しい理論理屈ではない、人は平等に生まれながらに人間としての根源的な幸せ感を感動の中に見出しているというのです。

小林先生は、「生命感動学」は「母学」にも通じているところがあると仰います。

そして、小林先生による『母学』出版と同時に昨年10月21日、東京丸ビルホールにおいて東京芸術大学と第一回母学

文 葛西得男

Text by Tokuo Kasai

会議を開催させて頂きました。東京芸術大学の伊東順二特任教授がコーディネーターを務められ、基調講演は日立製作所の小泉英明先生に「脳科学から見た芸術と倫理」というテーマでお話し頂きました。チャイルドケアと芸術の融合が子供たちの発達にとって、とてもプラスとなっていくという結論でもありました。

イタリアにはレッジョ・エミリアという幼児教育があります。この教育の芸術への取り組み方には素晴らしいものがあります。

我々、マザーシップ保育園が目指している芸術に取り組み保育の形でもあります。五感を介して子供たちの心と身体が健やかに育つていくと願っています。

Profile

1950年12月8日大阪に生まれる。1972年、追手門学院大学卒業後、米国ボストンカレッジに留学。1975年に帰国後、アップリカ葛西に入社。営業部、副社長、社長を経て、1996年に社会福祉法人松福会理事長に就任。松福会は社会福祉法人として高齢者介護施設「アップリケア」と認可保育園マザーシップ保育園を運営している。アップリカ葛西副社長時代に国連UNEP環境計画のスペシャルアドバイザーとして子供たちのために地球環境問題を考えるプロジェクトに参画し、世界の賛同者と世界会議、イベント普及活動などを行いながらその人脈などを広げ現在に至る。

